《特　集》子どもと読書

「ようこそ図書館へ！」子どもを対象とした図書館の多文化サービス

――横浜の事例から

加藤　佳代

はじめに

みなさんは、「図書館の多文化サービス」という言葉をご存知ですか。「民族的・言語的・文化的少数者（マイノリティ）を主たる対象とする図書館サービスで、（中略）日本で暮らすマイノリティの、知る自由・読む権利・学ぶ権利・情報へのアクセス権を、母語を中心とした資料・情報の提供によって保障しようとする」サービスです。（『多文化サービス入門』[1]より）

よこはまライブラリーフレンド[2]の一員として、市民として図書館にかかわる活動を続けてきた私が、多文化サービスを深く考えるようになったきっかけは、小林卓氏[3]の、「多文化サービスを、言語の障害があるからといってあきらめてしまうのではなく、ハードルを低くして、エスニックコミュニティの助力を得て、出来ることから始めよう」という言葉でした。[4]

「多文化サービスは、けっして特別なサービスではない。

いつも使っている図書館が、その人の『居場所』になってほしい」という同氏の言葉を胸に、いつかその実現に向けた企画を実行したいと願っていました。

二〇〇七年秋に、相談窓口や施設・学校で、外国人と向き合う人と連携をとるための図書館見学会(5)をおこないました。そこで出た提案やアイデアを、実践にどうつないでいくかを考えていたところ、二〇〇八年春に、横浜市立図書館から協働事業参加の呼びかけがありました。これを機に、外国籍、または外国につながりをもつ子どもたちが、日本の図書館に馴染み、親しむようになってほしい、図書館が居心地のよい場所であることを知り、本を通じて自分の世界を広げてほしい、一度来たあと、ひとりでも(または友だちや親と一緒に)来てみたいと思うようになってほしいという願いをこめて、通訳つきの図書館見学会と、図書館における科学あそびワークショップを、市民と図書館員が一緒になって企画・実施しました。今回ご紹介するのは、二〇〇八年度におこなった「横浜市立図書館における児童生徒に対する多文化・多言語サービス推進事業」(6)の活動の一部です。

「どうすれば図書館に入れますか?」

横浜市における外国人登録者の出身国で、最も人数が多い国は中国です。横浜市は上海市と友好都市関係を結び、中央図書館は上海図書館寄贈の中国書を多数所蔵しています。そこで、中央図書館に通える距離の中学校の中から、中華街に隣接する学校に対象を絞りました。同校には中国籍(または中国につながりをもつ)生徒が多数在籍し、日本語学習が必要な生徒に日本語および教科指導をおこなう国際教室が設置されています。見学会を実施するにあたり、どのようなことが知りたいか、実施時期や希望を、学校に出向いて聞くことにしました。

「生徒たちは本を読むのが大好き。しかし母語で書かれた本、十代の子どもが読みたい本が、どこにたくさんあるのかわからない。そういった本を学校が独自で入手するのは難しい」そういって先生が案内してくれた教室には、中国で人気の武侠小説、中国語版のハリーポッター、恋愛や友情を描いたライトノベルが並んでいました。

日本に来て、慣れない言葉や生活習慣の中、勉強の合間に手にとっているのでしょう。どれも表紙がボロボロになるまで読み込まれていました。新品のように綺麗な表紙の魯迅全集とは対照的で、中学生くらいになると大人が読ませたい本より「読みたい本」がどれくらいあるかがひとつの鍵だ、と思いました。これを目にしたことで、読み手である子ども自身の声を、図書館に届ける工夫が必要だと感じました。

「どうすれば図書館に入ることができるのか。どのような手続きをすれば本が借りられるのか、どのような本が、どこにあるのか、それがわかれば生徒は喜んで通うようになると思います」、この言葉を受けて、図書館カード作成から始まる入門的な見学コースを設定し、後で同級生や友だちに教えられるようになることを目標にしました。図書館の機能を知ってもらうため、普段入れない地下書庫もコースに入れました。行事が少ない秋休み前が、学級活動として組みやすいとの希望があったので日程を調整し、日本語版と中国語版のチラシを作成。図書館カード申込書と共に、学校経由、生徒に配布しました。

講義形式ではなく少人数の体験型でおこなうため二班にわけ、通訳も二名手配しました。通訳者は図書館が初めてだったので、事前に説明資料を渡し、本番前に研修をおこないました。主旨と目的を理解した上で、わかりやすく通訳してもらうため、研修は欠かせないことでした。

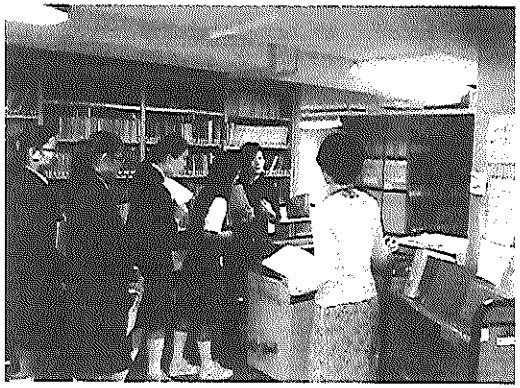
二〇〇八年一〇月九日、中国語を母語とする中学一～三年生九名が、先生と共に中央図書館に来館。土地勘がない所で図書館に辿り着くのはたやすいことではないため、先生の引率はありがたいことでした。図書館員の案内で館内を回り、みな初めて自分のカードを作りました。見学途中で『ナルニア国物語』の中国語版を見つけて「こういう本が読みたかった!」と大事そうに胸に抱え、早速借りていった女生徒、「こんなところに最新のサッカー雑誌がある!」と目を輝かせる男子生徒、「中国で買えなかった本がたくさんある!」と驚く生徒、それぞれが、自分の母語である中国語の書籍の多さに驚いていました。

見学後、「(人気作家)金庸の武侠小説シリーズが読み

たい」「恋愛小説がもっとあるといいな」「ハリーポッターシリーズ、三国志はどこにあるの」といったリクエストも出てきました。あとで聞いたところでは、解散後、図書館に残り、それぞれ好きな本を選んで借りて帰ったそうです。同校からは、来年度も同様の企画を実施してほしいという希望をいただきました。

数日後、生徒たちから中国語で書かれた感想文が届きました。「本の借り方や返却の仕方などがよくわかるようになりました」「一番楽しかったことは普段勝手に入れない地下書庫の見学です。中央図書館が大変気に入りました」「見学を通して書物への理解が一層深まりました。読書は知識を増やす手段であり、心を癒す最もよい方法です。悲しいときに読書は心を慰めてくれる良薬です。物語の中の主人公の運命に共感し、泣いたり笑ったり悩んだりして、いつしか自分の悩みさえ忘れていきます。読書はある種の心を癒すよい方法ではないでしょうか。少なくとも、私はそう思います。図書館に入れば本の香りが鼻をくすぐります。『本のふるさと』に足を踏み入れば、心が穏やかで嬉しくなります」

中国語の通訳から次のような感想をいただきました。「図書館探検に参加した子どもたちの驚きと喜びに、共感することが沢山ありました。日本語学習の本を探したり、好きな本を手にとって、めくったりする子どもたちの、生き生きした表情が忘れられません。来日したばかりの外国人の子どもにとって、日本語学習と日本の学校生活に慣れることが一番大きな課題ですが、毎日、日本



地下書庫にて（横浜市中央図書館 2008）

語のシャワーを浴びていても日本語がすぐに上達するわけではありません。日本語を学習している間、母語で自分の考えや思いなどを表現する機会が少なく、日本語でもうまく自己表現できないのが現状です。このような期間が長くなれば思考力が深まらないだけでなく、母語の表現能力も低下していく恐れがあります。子どもたちが、もっと図書館に足を運び、読書の楽しさを味わい、より充実した生活を送ってくれればと願っています」。

外国語を母語とする十代の子どもにとって、本は、頭の休息、心の栄養となり、図書館は大事な場所になることでしょう。きっかけさえあれば自ら図書館に通い出す手応えを感じた見学会でした。

「おいら、がんばる！」

横浜市南区は、フィリピン出身の外国人登録者が市内で一番多い地域です。同区内の南図書館はタガログ語で書かれた読み物を多く所蔵しています。その数は市内有数で、外国語資料コーナーのブックトラックには、タガログ語の読み物がぎっしり並んでいました。事前見学でそのようすを知り、これを必要な人たちに知らせ、利用を増やすにはどうしたらいいか、日頃、図書館に足を運ばない子どもたちが興味をもつにはどうしたらいいかを考え、図書館におけるワークショップを企画しました。なかなか図書館に来ない男の子が興味をもつよう、「科学あそび」を選び、通訳つきでも理解しやすく材料が集めやすい『よわいかみ、つよいかたち』（かこ さとし著・絵／童心社　一九八八）にしました。講師は実践女子大学教授の塚原博氏に依頼しました。地域や蔵書の特色を考慮して、通訳言語はタガログ語にし、タガログ語、英語、日本語でチラシを作りました。

二〇〇八年一二月二〇日、フィリピン、タイ、中国につながりをもつ小学生、中学生、高校生、保護者ら二四名が南図書館に来館。一〇円玉とハガキを使った科学あそびに取り組みました。その後、司書から図書館利用の説明を受け、館内を見学した後、英語とタガログ語の絵本の読み聞かせを楽しみました。外国人本人による読み聞かせは、それぞれの語感の違いや言葉の美しさに気づ

くきっかけを子どもたちに与えたようです。

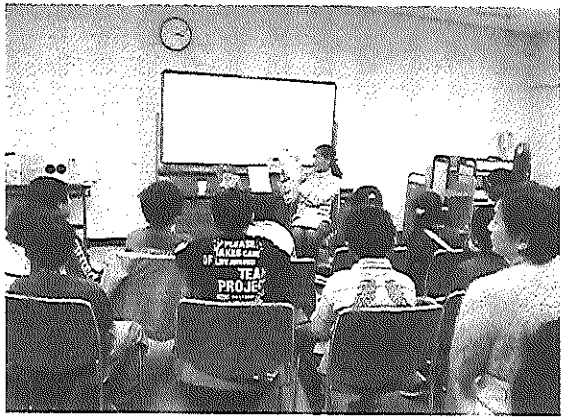
その後、参加者から次のような感想が寄せられました。

「実験だけではなく、英語やタガログ語での読み聞かせがとても印象的だったようで、普段あまり熱心ではない子が、帰り道に『今度、タイ語の教室に友だちも連れて来るよ』『おいら、がんばる！』と話してくれました。今日、図書館に行ったことが子どもたちにとって、きっとプラスになることと思います」

「塚原先生の進め方を参考に、今度、やってみようかなと思いながら参加しました。英語とタガログ語の読み聞かせも、とてもよかったですね。ゆったりとした英語の響きと、弾むようなタガログ語の響きは、世界にはいろいろな言語があって、それぞれ美しいことを改めて感じました。参加者の子どもも、母国語を誇りに思い大切にするきっかけになったようで、今回の委託事業の趣旨に合致していたように思います」

「後日、実験に参加した高校生に電話してみたところ『最近中央図書館へよく行っています。勉強しに』と言っていました。そのような気持ちになってくれてうれしいです」。

本を読む行為を、ただ促すのではなく、導入部分を工夫することで、子ども自身の新たな気づきや興味、自信につながる可能性を感じたワークショップでした。



タガログ語絵本の読み聞かせのようす
（横浜市南図書館 2008）

親子一緒に

日本で馴染みの少ない言語を母語とするゆえに、入手できる情報量が少ない人たちが市内に暮らしています。彼らにとって母語による情報は貴重です。母語で書かれた読み物は、時に精神的な拠り所になります。一方で、外国から日本に来て出産し子育てする中で、子どもにどのように母語や母文化を伝えていくか、これはたやすいことではありません。言語や文化が継承されない場合、親子間の理解やコミュニケーション上のギャップが生じます。これらを解決するひとつの手だてとして、図書館が存在し、機能するのではないかと考え、タイ国籍（またはタイにつながりをもつ）親子向けの見学会を企画しました。

企画段階から「日タイを言葉で結ぶ会／ラックパーサータイ（RPT）」に協力を依頼し、通訳をお願いしました。RPTは、市内小学校でタイ語の母語指導や学習支援をおこなっている団体です。タイの出版社と中央図書館の仲立ちとなり、タイ語図書がタイから多数寄贈される道筋をつくってきました。中央図書館に母語で読める本や絵本があること、日本の図書館のよさを、タイ人にもっと知ってもらいたいという希望をRPTももっていたので快く協力してくれました。

どのような見学コースにするかは、RPTのタイ人のかたや、日本人支援者に、まず図書館に来てもらって意見を聞くところから始めました。

「初めて日本の図書館にきて、大きくて素晴らしくて感動した」「見て回るだけでなく、子どもが絵本を手にとることができるとよい」「子どもたちは読み聞かせしてもらうのが大好き。母語教室ではいつもタイ語で読み聞かせをしている。日本語での読み聞かせや、紙芝居の時間があると、きっと喜ぶ」「日本に来たばかりで孤独な時間が多い。その寂しさを紛らわせることができる場所を今日、知ることができた」「数年前来た時はタイ語の所蔵があまりなかったが、今回とても増えていてすごいと思った」「子ども向けの見学会では、自分で本を借りたり、返すことを、自信を持ってできるように教えてほしい」「何

回見学しても新鮮な驚きがある。広くてどこに何があるかわかりにくいので慣れることが必要。タイ語の本も揃ってきたので、多くのタイ人に足を運んでもらえるよう宣伝したい」「地下書庫を見学した時の驚きは、是非子どもにも体験させてほしい」、これらの意見を踏まえ、見学コースを設定、日本語版とタイ語版のチラシを作成し、図書館カード申込書と共に、ＲＰＴ経由で児童と保護者へ事前に配布しました。

二〇〇八年一二月二六日、タイ語の母語教室に通う子どもとその友だち、母親ら二一名が中央図書館に来館。校門前に集合してからＲＰＴが引率してくれたので、行き帰りの不安が解消され大変助かりました。子どもが興味をもつようにとＲＰＴが作成した「図書館探検クイズ」を手に図書館員の案内で館内を回りました。子どもの本コーナー見学後、子どもたちはおはなしの部屋で司書による読み聞かせを楽しみ、大人たちは別フロアの外国語の本コーナー、雑誌・新聞コーナーを見学、検索機の使い方の説明をうけました。その後、親子揃って地下書庫を見学し、本の多さと機械で運ばれる仕組みに目をみはりました。この日、子どもも保護者も初めて自分の図書館カードを作り、嬉しそうに本を借りていきました。

外国語の絵本コーナーにて
（横浜市中央図書館 2008）

その後、参加者から、「本がいっぱいですごかった。地下三階まであってびっくりした」「本が借りられると思わなかった。楽しかった」「これから子どもを連れて一ヵ月に一回は来たい」「帰り道、子どもたちがいつもに比べて生き生きとしていたように感じました。きっと新しい世界を知ることができてうれしかったのでしょう」という感想が届きました。

今回の見学を機に、ＲＰＴが翻訳した「図書館利用案内」「外国語本コーナー利用案内」が貴重な成果物となり、タイ語版の「横浜市立図書館の使い方」が、横浜市立図書館ホームページ(7)に掲載されました。自分の母語で書かれた説明があると、関心が湧き、正しい知識と自信をもって利用できるようになります。これを機に、多くのタイ出身の方々に使っていただきたいと思います。

おわりに

事業をすすめる中で、日本の図書館がどのようなサービスをする所か、どうやってアクセスしたらいいか、わからない人がまだまだ多いこと、しかし、いったん足を踏み入れ、魅力的な蔵書や機能を知れば、目を輝かせる子どもや大人がいかに多いかを知りました。

今回、特に重視したのは、外国人当事者および、当事者に近い人の話や要望を丹念に聞き、それを企画に活かすことでした。これは彼らの見学会への参加動機となり、その後の利用につながる大きなポイントです。また、初めての場所に足を踏み入れ、知らない言葉や人に囲まれる負担を少しでも減らすためには、彼らと信頼関係を築き、当事者が信頼を寄せる支援者や学校の先生の協力が不可欠ということも、よくわかりました。

本を揃え、アクセスマップや館内案内を整備し、利用パンフレットを翻訳すると同時に、彼らが抱く心理的な距離に気づき、それをどのように縮めるか、当事者と一緒に考えることが大切です。図書館だけ、市民だけでやろうとしないで、互いにできる所で知恵と力を出し合い、さらに多方面へ働きかけることが解決につながります。その働きかけに応えてくれる人が、必ずいることを実感した一年でした。

「思考言語で書かれた本と触れる時間は、日本語で氾濫した日常から逸脱できる数少ない時間で、荒波の中で息継ぎをし、脳に酸素を送り込むようなもの」、これは、事前見学会(8)に参加した人の感想です。これを聞き、多文化サービスがいかに大切で必要なサービスであるかを確信しました。

「書物は成長期の子どもたちにとって、人生を豊かに生きるためのよき友、心の糧、人生の師匠です」中国語の通訳が寄せてくれた言葉です。まさにその通りだと思います。その書物に出会えるのが図書館だと思います。これからも図書館の多文化サービスの充実に向け、市民としてできることを提案し、実行していきたいと思います。

（かとう　かよ　よこはまライブラリーフレンド事務局）

(1)日本図書館協会多文化サービス研究委員会編『JLA図書館実践シリーズ2　多文化サービス入門』(二〇〇四)

(2)市民により一九九五年一〇月に設立された団体。図書館の応援団として、図書館利用の可能性を探りながら、図書館を市民の図書館といえるものにするための活動をおこなっている。

(3)むすびめの会(図書館と在住外国人をむすぶ会)事務局。『JLA図書館実践シリーズ2　多文化サービス入門』編集長。現在、実践女子大学准教授。

(4)よこはまライブラリーフレンド、(財)神奈川県国際交流協会共催「図書館における多文化サービス・展示&セミナー」にて(神奈川県立地球市民かながわプラザ　二〇〇二)

(5)よこはまライブラリーフレンド主催「図書館見学会・図書館の多文化サービス」(横浜市中央図書館　二〇〇七)

(6)文部科学省「平成二十年度　地域の図書館サービス充実支援事業」委託事業。「横浜市教育委員会(中央図書館・生涯学習課)」、「よこはまライブラリーフレンド」、「かながわこどもひろば」で実行委員会を構成。見学会やワークショップのほか「展示とブックトーク・子どもの本で知るアジアの国々」「アジアの子どもの本セットの学校貸し出し」「講演と報告会・多文化社会を生きる子どもと読書」を実施。詳細は『ようこそ図書館へ！横浜市立図書館における児童生徒に対する多文化・多言語サービス推進事業報告書』(同事業実行委員会編　二〇〇九)参照。

(7)「横浜市立図書館の使い方」外国語版サイト
http://www.city.yokohama.jp/me/kyoiku/library/foreign/

(8)「多文化サービス推進事業・関係者向け事前見学会」(横浜市中央図書館　二〇〇八)